

『海に向かう道、雨のち晴れ』

奈良 敏行

(笈の定有)

三砂慶明さん主宰の「読書室」は一体なんなのだろう。わたし自身もお世話になっているのだから、いまさらそんな事をいうのも変なのだが、ますます興味が深まっています。サイトでは三砂さんが発掘した本の販売もしています。販売というよりは、出会いを必要としている人に機会を作つてあげ、そして届けるという気配の方が強い。「届ける」というのが使命なのかと思える。

最近知人が、不思議な本を三砂さんが紹介しているよ、と教えてくれた。著者は水崎誠也、聞いたことのない名だ。『海に向かう道、雨のち晴れ』という本だった。文庫本サイズ、上製本、しかも背には「溝」が付いている。白っぽいカバー付きだが、複雑な文様を織り込んである紙質。ゼいたくな造りだ。十六年前に刊行された小説だった。

定有堂ではノンフィクションやエッセイ、そして哲学の

本がさきやかだがよく売れていた。だから小説のことに詳しくなれなかった。なぜだろう。小説はエンターテイメント性が強く読者は図書館を利用していたように思う。買い置く必要はなかったのだろう。定有堂の数少ない読者は「物語」よりも「思索」することを好む人が多かった。「世界は言葉でできている」という人もいた。わたしもそのような読者の一人だった。美しいものは現実にはなく、言葉の上にはしかないと思つていたのだろうか。

この小説は美しいと思つた。定有堂教室では小説の読書会もやっているので、手にはするのだが、ほとんど読み通すことはない。けれどこの本は一気に読み通せた。小説つてこのようなもので、このように書くのかと驚きもした。『ドルジェル伯の舞踏会』（ラディゲ）の訳者は、その読後感を「日常意識の達しない深いところにしかれた将棋盤上で、象牙彫りの駒がふれあう音を聞くような感じである。」と語る。わたしは、同じような心理小説なのだが、『海に向かう道、雨のち晴れ』に、ビリヤードの玉がぶつかり合うような、硬質な音を感じた。一瞬の玉の描く軌跡がそこに感じられた。周囲は無音で静かなのだ。この静けさが「美しい」のだろうか。

主人公の女性は地元高校の造形学科を出て、デザイン事務所に勤める。事務所の東京移転にともない上京、高校時

代の友人の住まいに同居する。五歳年下の男性と親しくなり、ある日故郷の海へ案内したくなる。「私」は、この海は「私の海」だと、心の秘め事として拠り所になっている。唯一の希みが、生を終えたらこの海へ散骨することなのだ。小説のストーリーは、この海をめざして到着し、浜辺へ恋人と向かうだけの話だ。

「私」の回想がこの海の道に向かって解き放たれる。そして三つの玉が触れ合ってコツンコツンと出口をめざす。玉を転がす力は、高校時代淡い付き合いに終わった、「懐かしい人」の失踪という事件だ。

最初の玉は、レンタカーの給油に寄ったスタンドの男の回想だ。「私」は気がつかないが、男は「懐かしい人」の近くにいた男だ。

《俺の記憶にある高校時代の女は、黒目がちの瞳でまっすぐ相手の目を見て話した。なにか、相手の考えていることさえも見えているのではないかと疑われるような、見つめられていると気恥ずかしさを覚えるような、強い力を持った視線だと、当時の俺には感じられていた。》

二つ目の玉は、東京に移り住む時転がり込んだ高校時代の友人だ。彼女はこのところ、しきりに失踪した共通の友人の夢を見る。そして「私」のことをこんな風に語る。

《彼女のある種のにえきらなさと、親にも言わずに東京に

出てきてしまう向こう見ずなところとは、表裏一体のもののように、あたしには見えていました。》

《つまり、内心の不安を見せないようにしたり、自分で打ち消すために、なにか突飛な行動をとって、その行動がまた別の悩みごとを生むといったような…。》

三つ目の玉は五歳年下の彼だ。「私」は、彼は自分のことを理解できないと思っている。だから同じ話を何度も何度もする。彼は何度も何度も聞かされるので理解はできないが、「細部まで記憶してしまった」、一緒に育ってきたようにすら思える、という気持ちになる。

「私」は、人は私と違う。それは「私の海」を知らないからだと常々思う。

《海は、あらゆる命が生まれてきたところで、そのそばで生まれ育つと、自分や自分以外の誰かが、生まれてやがて死んでいくということについての感覚が、そうではない人たちとは、ちょっと違ってくるのかもしれない。》

彼は理解できないが暗記するほど耳を傾け続ける。この砂浜をたどりながら、「ぼくとは違うきみのことを、少し理解できる」と思いはじめる。目の前の美しい海のせいだ。そして心につぶやく。

《海は、あらゆる命が生まれてきたところで、そのそばで生まれ育つと、自分や自分以外の誰かが、生まれてやが

て死んでいくということについての感覚が、そうではない人たちとは、ちよつと違つてくるのかもしれない。そんな考えが、ふと頭をよぎる。》

玉は硬質な音を立てて転がり、この同じ場所へとたどり着く。

ここには具体的な地平の描き出す心理の高まりと沈静がある。

偶然手にした出会いだが、小説もいいものだと思った。わたしは人見知りだから、この著者と語り合う機会はないだろう。わたしは何処へも出かけない。もしこの著者が鳥取へ訪れたら、せめて連れだって砂丘へ行くだろうか。

話すことはなにもない「海つて広いですね。そして、青いですね」というだけなのだろうか。

2025.03.03

(参考)

水島誠也 『海に向かう道 雨のち晴れ』 BOTANICA 2009

ラディゲ 生島遼一訳『ドルジェル伯の舞踏会』新潮文庫 1965

